

ヤコブの手紙3章13節 「柔和な行いにある知恵」

1A 争いを引き起こす言葉

1B 「正しい怒り」に隠れた汚れ

1C 教会に持ち込む議論

2C 唇の汚れを嘆く預言者

2B 実による判断

1C 行いに現れる信仰

2C 偽預言者の「正しい」言動

3B 義を実現しない人の怒り

1C 神にしかない義

1D 善悪の知識の木

2D 妬みによる殺人

3D 「義人」が告白した悔い改め

2C 人を欺くサタン

1D 人を神のようにさせる惑わし

2D 神を人のしもべのようにさせる惑わし

3D 神の名を使った欲望のはけ口

2A 平和の種による義の実現

1B 柔和な行い

1C 自制

2C 慎み深さ

3C 怒りを任せる心

2B 王キリストの宣言

1C 礼拝にある平和

2C 真理にある自由

3C 人知を超えた知恵

4C 憐れみ

本文

ヤコブの手紙3章を開いてください、午後に1節ずつ見ていきますが、今朝は13節に注目します。「あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。」3章は、私たちの発する、言葉の問題を取り上げています。日本語に、「口は禍の元」という言い回しがありますが、ヤコブは、信仰を持っているとされている者たちが、この口による災いを引き起こしている問題です。多くの知識があっ

て、言葉においてこの人は知恵があるというように思われている人が、必ずしもその知識にふさわしく、霊的とは限らないことを示しています。ヤコブは、知恵があり、分別があるならば、それにふさわしい柔和な行いがあり、立派な生き方があるのだと説いています。

1A 争いを引き起こす言葉

1B 「正しい怒り」に隠れた汚れ

1C 教会に持ち込む議論

正しいことを語っているからといって、正しいことを行っているわけではないことを私たちは知っています。教会であればなおさらです。私がしばしば問題に感じる人たちの多くが、実はその言っていることについては、全くの正論であり、同意するのです。何が問題か？それは、教会が、神にあって憐れみを示すところであり、その憐れみには、誤っていることをしていたり、言ったりしている人々に向けられるからです。

神を恐れ敬い、敬虔に歩むことが、神の教えであり、健全な教えです。けれども、それとは違った教えをする者たちがいます。そして、教会が魂の休むところ、癒されるところではなく、言い争いのところ、議論のところとしていくのです。ヤコブだけでなく、パウロ、ペテロ、ヨハネ、ユダ、みな、言葉の言い争いをしている者たちについて警鐘を鳴らしています。「I テモ 6:3-5 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。これらは、知性が腐って真理を失い、敬虔を利得の手段と考える者たちの間に生じるのです。」

2C 唇の汚れを嘆く預言者

聖書の中には、正しい預言を語っているのに、その後、「自分の唇が汚れている」と嘆いた預言者がいました。イザヤです。彼は、イザヤ書 1 章から 5 章までに、ユダとエルサレムで行われている不正に対して、糾弾する預言を行いました。それらは、確かに神からの宣告であり、正しいものだったのです。

けれども、6 章を見ると、イザヤは主の御座の幻を見ます。圧倒的な威光をもって、そこに主はおられました。ヨハネは、イザヤはイエスの栄光を見たと言っています(ヨハネ 12:41)。イエスご自身の威光です。彼は叫びました。「6:5 ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。」

イザヤは、確かに彼らの不正を暴く預言を行っていて、それは正しかったのです。けれども、彼が知らなかったのは、これからますます、悪くなっていくということです。彼の想像の域を越えていました。しかし、それでも彼は預言を続けていかなければいけない。そこでイザヤに必要なだったの

は、彼自身もその汚れを持っているという悟りでした。彼が預言者として立っているのは、もっぱら神の恵みによるのであり、彼が正しいから預言しているのではなく、主の憐れみによって行っていることなのだとのことです。主に召されたという確信のみが、これからの大きな圧力を受ける中でも預言を可能にしたのです。

そのために、主はご自身の御座の幻をお見せになりました。彼の知恵は、圧倒的に、主こそがまことの王であり主権者だということ。その圧倒的な神の臨在の中で、ひれ伏すところから出てくるのだと知らないといけませんでした。天から知恵です。そして天からの知恵は、人を高ぶらせることにはならず、ただ純真な思いと、砕かれた心から出てくる柔和さによるものなのです。

2B 実による判断

1C 行いに現れる信仰

イエス様は、偽預言者について、偽預言者については、「マタイ7:15 羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」と言われました。その見分けについては、「7:20 こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです。」とされています。その人が表面的に言っていること、行っていることではなく、その実質、果実として出てくるもので判断できるということです。

2C 偽預言者の「正しい」言動

偽預言者は、主イエスの名を呼ぶことができるし、またその名によって預言も、奇跡も行うことができるのです。言い換えれば、正しい言葉を語り、正しい活動もできるのです。けれども、恐ろしいことは、主ご自身は、「マタイ7:23 わたしはおまえたちを全く知らない。」とされていることです。なぜか？「不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」とされているのです。不法を行っているところに、彼らが偽物であることが明らかにされています。言っていることだけでは、その人が知恵があり、分別があるとは分からないのです。実によって見分けます。

3B 義を実現しない人の怒り

1C 神にしかない義

一見、正しいことを言っているのに、その知恵が神からではないという問題は、どうして起こっているのか？先ほどの、イザヤの嘆きにも表れていました。自分が汚れているということが分かっている、言い換えれば、自分に義があると思ってしまうところに、大きな間違いがあります。表面的な正しさではなく、心の奥底まですべて知っておられる神にこそ、義があるのです。

1D 善悪の知識の木

そもそも、人には善悪の知識はなかったのです。神にしかないのです。人は、神にしかない善悪の知識は、神により頼むことによって初めて得られるのであって、自分自身は全くその区別がつかない。

かないことを告白すべきなのです。それをしなかったのが、アダムです。善悪の知識の木から実を取って食べました。

2D. 妬みによる殺人

それで、エデンの園からアダムもエバも追放されましたが、その子カインが、弟のアベルを殺しました。その原因が何だか分かりますか？そうです、「自分が正しい」と思っていたからです。主に對するささげ物で、主は、弟アベルのいけにえは受け入れられましたが、カインのは受け入れませんでした。これは、人間の物差しで見たら、不公平です。しかし、主は、カインが良いことをしていないことを彼自身が知っているとし唆しました。なぜなら、主は、ご自身に近づく道をすでに、犠牲の命によるものであることを示しておられたからです。

しかし、カインは自分自身に義があると思っていた。神は不公平であり、私が正しいと思っていた。しかし、それは知恵のないことです。自分がたとえ分からなくても、主にこそ義があることを認めなかったのです。表面的な、人間の押し量る正義や公正ではなく、私たちの心の純真さや清さが、正しさに大いに関係するのです。カインは、自分が正しいと思い、自分が不公平な取り扱いを受けたと自己憐憫に陥っていましたが、彼が妬みに満ちていたことを神はご存じだったのです。自分は自分の事はわかっていると思ひ込んでいましたが、自分の心さえ知りませんでした。

3D. 「義人」が告白した悔い改め

主ご自身が、義人であると呼ばれたヨブがいます(エゼキエル 14:14)。しかし、彼自身が主の前で悔い改めたのです。彼があまりにも理不尽な苦しみを負いました。それで、自分の正しさをずっと訴えました。友人たちは、何か彼が罪を犯したら苦しんでいるに違いないと思ひていましたが、彼には心当たりが全くないからです。むしろ、主を恐れて正しいことしかしてきませんでした。しかし、彼が主に自分の義を訴えている中で、主が嵐の中で現れました。天地創造について、その細かい被造物の成り立ちについて、答えなさいと主は挑まれました。ヨブは、自分が知っていると思ひ込んでいたことが、全く何も知らなかったことを知ったのです。それで、悔い改めました。「ヨブ 42:3 あなたは言われます。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか」と。確かに私は、自分の理解できないことを告げてしまいました。自分では知り得ない、あまりにも不思議なことを。」

そして、主はヨブの友人たちに怒りを向けておられましたが、ヨブに執り成しの祈りを願いなさいと命じられます。ヨブは、自分のことをあれほどひどくいった友人たちのために、執り成すことについて、これはあまりにも理不尽と、普通なら思います。けれども、主の圧倒的なご臨在の中で、へりくだったヨブは、その憐れみを彼らにも示すことができました。それで彼は癒されるのです。

2C 人を欺くサタン

このように、人には義はないのです。神のみにあります。そして、人は神により頼むことによって、

初めて、神に似せて造られた者として知恵が与えられるのです。

1D 人を神のようにさせる惑わし

しかしサタンは、この部分を惑わします。つまり、人に、神のようになればよいという、そそのかしをするのです。神に似せた者ですから、人には栄誉と力が与えられています。しかし、神ご自身ではないのです。似ているけれど、本人ではないのです。しかし、悪魔は、神のようになれるとそそのかすのです。そうやって、正しいことをやっているようでいて、全く正しくないことを行っていくという人間の過ちがあるのです。それが、神からではない、混乱と分裂が起こるのです。

2D 神を人のしもべのようにさせる惑わし

そして、今度は、神を人のレベルにまで引き下げるようにさせます。神は圧倒的な主権者であり、その思いは、天が地よりも高いように高く、私たちとは異なるのです。それなのに、まるで人と同じようなものだとみなして、神が自分の思い通りになる、しもべのような存在なのだと、恐ろしいことに思い込むように仕向けます。祈ったけれども、祈りが聞かれなかったから、この神はとんでもない奴だと言い捨てる人々が、時々います。それは言い換えれば、「おまえは、俺の命令に聞き従わなかったのだ」と言っているにすぎません。

3D 神の名を使った欲望のはけ口

したがって、神からのものだと、実は自分の欲望を果たすことができちゃうのです。自分が神のように賢い、分かっている、正しいとふるまいます。そして、神は、自分のしていることに是認し、いや、したがってくれると思いついています。イエス様は弟子たちに、「ヨハネ 16:2 **あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。**」とされています。

イスラエルのガリラヤ湖畔には、イエス様が五千人にパンと魚を与える奇跡を記念する教会があります。私たちがそこを訪れた時に、放火によって黒焦げになった、生々しい部分がありました。狂信的なユダヤ教の若者が放火したのです。ガイドさんが言っていました。「自分の脇にでも、神がいると思いついてるんですね。」そう、天におられる神で、いと高きところにおられるのが神です。それなのに、自分のそばに、いや、自分の足元にでも神がいるのだと思いついてるのです。

2A 平和の種による義の実現

1B 柔和な行い

ヤコブの手紙では、このような知恵は、「**地上のもの、肉的で悪魔的なもの**」と言っています(3:15)。では、天からのもの、神からのものはどのような知恵なのでしょう？再び、本文を読みましょう。13 節の後半に、「**その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。**」とあります。柔和な行いを示していることが、神の知恵なのです。

1C 自制

柔和というのは、単なる優しさではありません。むしろ、自分が力があるのにも関わらず、それでもその力を用いていかないという積極性があります。イエス様が、ゲッセマネの園で捕らえられる時に、ペテロが剣を出して、祭司のしもべの耳を切り取ってしまいました。イエス様は、彼の耳を癒されました。そして、ペテロにはさやに収めなさいと言いつけます。こう言われます、「マタ 26:53-24 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」一軍団が六千人単位の軍隊です。7万2千人のみつかいを、いま、配下につけることができるのです。一人の御使いでさえ、大地震を起こすことができるのです。またたく間に彼らは滅びますが、しかし、聖書が成就するため、つまり、ご自身が罪のいけにえとして神に献げられるために、そのことを行われたいのです。つまり、知恵というのは、こうした自制に支えられているものなのです。

柔和さは、本来なら相手に復讐することができても、それを敢えてしないところに現れます。ダビデのことを思い出してください。サウルが自分を殺しに追ってきていますが、エン・ゲディの要害に隠れていたところ、自分たちの隠れていた洞穴に、ちょうどサウルが用を足すために入ってきました。ダビデの部下は、「主が、あなたの敵をあなたの手へ渡されたのです。」と進言したのですが、ダビデは、上着の裾を切り取ったことで心を痛めました。そして部下に、「彼は主に油注がれた方なのだ」と言って、説得します。ダビデにとって、自分が悪いことしていないのに、義父から殺されそうになっているという、とんでもない不条理にあります。けれども、自分の手で裁きを下すことを控えたのです。これが柔和さです。

2C 慎み深さ

そして、柔和さには、慎み深さがあります。つまり、自分が今の状況のすべてを知っているわけではないとみなすことです。先ほどのヨブの例では、ヨブはまさか、サタンが神に対して、ヨブに触れるように許可を取ったことなど、分かっていませんでした。私たちの思いをはるかに超えるわけであり、今、起こっていることがどんなに不条理でも、主が何か、事を行われているとみなします。

そして、ダビデの生涯にある知恵を見ますと、ダビデは、自分自身がイスラエルの王になることを、すでに示されていました。けれども、それは主がお決めになる時があり、彼は、自分の手で王権を奪取することはなかったのです。ゆえに、ダビデが王となる時に、サウルについていたイスラエルの人々は彼を王にすることができたのです。サウルとダビデのどちらが正しいか？という、不毛な戦いをせず、平和の中で神に義があることを認める、統一国家となりました。

3C 怒りを任せる心

そして、柔和さは、自分の怒りを神に任せるところにある知恵です。ヤコブ 1 章で学んだように、

人の怒りは神の義を実現しません。怒りを主に任せるのです。ダビデも、サウルの前で、「主があなを裁かれるように」とはっきり言いました。自分で裁くのではなく、主に裁いていただきます。

2B 王キリストの宣言

そして、上からの知恵、神からの知恵は、17 節にこう書いてあります。「3:17 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」私は、これを「キリストを王とするところの知恵」と名付けたいと思います。

1C 礼拝にある平和

一つ目に、「清い」とありますね。イエス様は、心の清い者は幸いで、それは神を見るからだと言われました。つまり、この方を王として、主として礼拝する中に、平和があります。主を礼拝し、主を仰ぎ見る時、その清い心、純真な心と言ったらよいでしょう、そこに主がおられます。これは、何にもかえがたい私たちに与えられた財産です。主がおられるということほど、私たちが癒され、平和に満たされることはないでしょう。礼拝に裏打ちされたのが、まことの知恵です。

2C 真理にある自由

そして、真理にある自由があげられます。平和、優しい、協調性があると書かれていますが、主は、私たちが真理によって、罪から自由にします。自分中心な思いがあるから、争います。自分を愛するから、相手に冷たくします。協調性、すなわちキリストにある一致から遠ざかっています。しかし、真理によって私たちは、これらの罪、欲望から自由にされます。自分のことなど、どうでもよくなります。

3C 人知を超えた知恵

そして、人知を超えたところの知恵が与えられていますね。偏見がなく、偽善がないとありますが、人はどうしても、自分を中心に相手を偏り見えています。また人に良く見せます、偽善です。しかし、自分から離れているので、誰もが思いつかないことも思いつくこととなります。それが、神から与えられたものであり、自分では理解できないのですが、結局、事は善に働いているのです。

4C 憐れみ

最後に、知恵は憐れみを示すことに現れます。「あわれみと良い実に満ち」とありますね。どんな時であっても、どんな困難や不条理がある時でも、最も大切なことが何かを見失っていません。キリストが自分に憐れみ深かったように、自分も憐れみを示すことが、みこころであることを知っているのです。知恵が、人々への憐れみに向くのです。例えば、地震が起こり、人々が被災します。誰がいけないのか？ということの人々が議論します。しかし、キリスト者は祈りに導かれます。そして救援に導かれます。そこに、あらゆる知恵が満ちるようになります。

歴史を通じて、今の文明を支えている、さまざまな価値が、キリスト教から来ていることは、だれも疑うことはできない事実です。病院や学校がそうです。たった一人の人も、主にあって高価で尊いのです。当時の人々が、そんな愚かなことをどうしてするのか？とっていたことが、今では当たり前になっています。また、不条理や不正がある時に、その闇を表に出す時に、クリスチャンが用いられていることが、とても多いです。日本では、北朝鮮による拉致を暴き、救出の活動をしている先頭にいる人々が、クリスチャンです。ジャニーズの性加害の問題を名前を出した公表した最初の人々の一人が、クリスチャンです。

私たちは、良かれと思っていることに従うのではなく、主を求めている時に、主に従っている時に、そして何よりも主を礼拝している中で与えられている知恵があり、その知恵は平和であり、そしてそれが自分たちの義ではなく、神の義を実現するのです。